

第一生命ホール
3周年

日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA



第177回定期演奏会
The 177th Regular Concert

創立40周年記念コンサート

The 40th Anniversary Concert

創立団員らが集う

企画・構成 = 宮田耕八郎



2004年 11月26日 [金]
午後7時開演 (午後6時30分開場)
第一生命ホール

- 主催：特定非営利活動法人日本音楽集団
NPOトリトン・アーツ・ネットワーク / 第一生命ホール
- 助成：平成16年度文化庁芸術団体重点支援事業
- 日本音楽集団：<http://www.promusica.or.jp/> <http://www.wahoo-net.com/promusica/>
E-mail office@promusica.or.jp
- トリトン・アーツ・ネットワーク：<http://www.triton-arts.net>



一、三つのフェスタル・バラード(1954年作曲・1975年編曲)／三木稔作曲・野坂恵子編曲

MIKI Minoru & NOSAKA Keiko(arr.) : Three Festal Ballads

[二十絃箏] I 熊沢栄利子・早川智子・山田由紀 II 田村法子・高橋はるな・彦坂恵美
III 桜井智永・三宅礼子・久本桂子
[十七絃] 宮越圭子・久東寿子・佐藤里美

二、鹿の遠音／宮田耕八朗編曲・構成

MIYATA Kohachiro(arr.) : Shika-no-tone

[尺八] 藤崎重康・竹井誠・米澤浩・水川寿也・添川浩史・加藤秀和・阪口夕山
元永拓・渡辺淳・原郷隆

三、新千鳥の曲(1994年)／吉沢検校作・秋岸寛久編曲・尾崎太一作調

AKIGISHI Hirohisa(arr.) : Shinchidori-no-kyoku

[笛] 越智成人 [尺八 I] 加藤秀和・阪口夕山 [尺八 II] 元永拓・原郷隆
[三味線] 箕田司郎 [琵琶] 首藤久美子
[箏] I 山内喜美子(友情出演)・早川智子 II 山田明美・山田由紀 [十七絃] 三宅礼子
[打楽器] 尾崎太一・望月太喜之丞・若月宣宏・盧慶順
[指揮] 秋岸寛久

四、●「子供のための組曲」より1・3・5章(1964年)

- 組曲「人形風土記」より〈のろま人形〉〈流しびな〉(1966年)／長沢勝俊作曲
(演奏順—1章、3章、のろま人形、流しびな、5章)

NAGASAWA Katsutoshi : From "Suite for Children" and "Ningyo Fudoki Suite"

[笛] 望月太八(友情出演) [尺八] I 宮田耕八朗 II 竹井誠 III 米澤浩
[細棹三味線] 杵屋五三吉(杉浦弘和)(友情出演) [太棹三味線] 坂井敏子(友情出演)
[琵琶] 田原順子 [箏] I 白根きぬ子(友情出演) II 野坂恵子(友情出演)
[十七絃] 宮本幸子(友情出演) [打楽器] 尾崎太一・高橋明邦
[指揮] 田村拓男

..... 休憩.....

五、キビタキの森(1979年)／宮田耕八朗作曲

MIYATA Kohachiro : Kibitaki-no-mori

[尺八] 宮田耕八朗 [箏] 砂崎知子(友情出演)

六、古代舞曲によるパラフレーズより「前奏曲」(1966年)／三木稔作曲

MIKI Minoru : Prelude from "Paraphrases after Ancient Japanese Music"

[笛] 西川浩平 [尺八] I 藤崎重康・水川寿也 II 加藤秀和・渡辺淳
[三味線] 杵家七三・山崎千鶴子 [箏] I 熊沢栄利子・久東寿子 II 桜井智永・田村法子
[十七絃] 宮越圭子・久本桂子 [打楽器] 若月宣宏
[指揮] 田村拓男

七、●春の一日より〈序曲〉〈花の輪〉(1997年)

- 冬の一日より〈序曲〉〈氷すべり〉(1980年)

- 大津絵幻想より〈長刀弁慶〉〈雷と太鼓〉(1981年)／長沢勝俊作曲

NAGASAWA Katsutoshi : From "A Day in Spring", "A Day in Winter", and "Otsu-E Fantasy"

[笛] 西川浩平・越智成人
[尺八] 宮田耕八朗・藤崎重康・竹井誠・米澤浩・水川寿也・添川浩史・加藤秀和・阪口夕山・元永拓
渡辺淳・原郷隆
[胡弓] 多々良香保里
[細棹三味線] 杵家七三・箕田司郎 [太棹三味線] 山崎千鶴子・穂積大志
[琵琶] 田原順子・首藤久美子
[箏] I 熊沢栄利子・桜井智永・久東寿子・田村法子・山田由紀 II 山田明美・早川智子・三宅礼子
高橋はるな・彦坂恵美 [十七絃] 宮越圭子・丸岡映美・久本桂子・佐藤里美
[打楽器] 仙堂新太郎・望月太喜之丞
[指揮] 田村拓男

祝 創立四十周年

気功尺八 村岡 実

おめでとうございます。感無量です。東京尺八三重奏団(横山勝也君、宮田耕八朗君に私)の第二回演奏会の打ち上げを、拙宅で開いた時、大いに盛り上がり、邦楽器のオーケストラを創ろうではないかと、集団創立への狼煙が上がり、翌六四年日本音楽集団の第一回演奏会が実現しました。私は、ヒット歌謡の録音と、演奏で忙しくなっていたこともあり、第一回発表会后集団を退団して、フリーとなり、尺八の大衆化、現代化に力を注ぐようになりました。あれから四十年、人生いろいろ。集団は、世界に邦楽器の現代性、芸術性をアピールし、輝かしい軌跡を築いて来ました。五十周年に向かって更に、精進、益々のご発展を心から祈願しております。わたしもまだまだ息の続く限り……。



Photo ©邦楽ジャーナル/渡部晋也

創立40周年にあたって

宮田 耕八朗

《日本音楽集団の創立以前から創立初期のことなど》

1960年のある日「村岡さんという人が尺八トリオを作ろうと言っているので会ってみなさいよ」というお誘いを受けました。この話を持って来られたのは渋谷区幡ヶ谷にお住まいで、都山流尺八の先生をする傍ら尺八の袋や歌口キャップを扱っていて、尺八の稽古場を訪問して販売をしていた西村鏘山という方でした。その頃渋谷区笹塚に稽古場を持っておられた兼安洞童先生のところへ通っていた私の吹奏を見かけて心にかけてくれたのです。そして、東京へ出てまだ日の浅い横山勝也さんと、村岡実さんの家で顔合わせをしました。

今年81歳の村岡さんは元気はつらつ、外交的で雄弁ですが、30半ばのころの彼はもの静かで、雄弁とは言えないのですが情熱を持って語る人でした。木管五重奏や弦楽四重奏のように音域の拡がりのある合奏団は従来からありますが、音域のあまり広くない尺八だけのトリオというものの可能性に私は疑問があったのですが、村岡さんの熱弁に動かされ、それにこの3人だと当時の尺八仲間にしてはめずらしく音がハモるし、うれしくなっていっしょにやることになりました。当時尺八のプロと言えば弟子に教えて生業を立てるレッスンプロしか思い浮かばなかったのですが、村岡さんは演奏活動をしようと言うのですから一歩も二歩も進んでいました。

実際彼は楽譜出版社に勤めていた時のコネを生かして作曲家たちに尺八の性能と効用を説き、口説き落された作曲家がひと度尺八を使ってみると、彼の独特な魅力ある節まわしが好評で、芝居や映画、放送劇などのBGMに、歌謡曲に、テレビの歌謡番組などなどでとても忙しくなりました。それで依頼されたスタジオ仕事がダブってしまうと断るには忍びないので私や横山さんに「頼むよ」とふりわけてくれました。私たちは彼が音楽生命をかけて開拓した仕



事ですから、彼が築いたギャラを決してダンピングしないことを仁義として仕事を受けましたが、3人それぞれ持ち味が違い、3人ともずいぶん忙しいスタジオミュージシャンになりました。

尺八が有効な楽器であることが認知されて、BGMや現代邦楽に重用されて忙しくはなりましたが私には釈然としないものがありました。どんな楽器でも演奏者は、その楽器として可能な限り美しい音色が出せるように訓練して演奏するものですが、あの時代そうとも言えない風潮が流行っていて、特に尺八には、荒々しさ、荒れずさんだ音あるいは、これでもかというほどおどけたりすることが要求されることが多かったのです。それが好きで、その為にこそ尺八をやっているという方には、おあつらえ向きで、とても良いのですが、私としては瑞々しい美しい音色で、心地よい音楽を奏でたいと願っていたものですからどうも……。

それでも生活がかかっていますから「ハイハイ、それでは営業用の音で」とご要望にお応えして忙しく仕事をこなしておりました。

話はもどりまして、忙しくなる前ですが1962年に「モダン尺八トリオ」と名のりを上げ、そろいのタキシードを作って第1回目の演奏会。その後、演奏会に関わった人たちと相談し、この名前ではレパートリーに限られるようだから——と、「東京尺八三重奏団」と改名して1963年に2回目の演奏会をいたしました。ここまでの費用はタキシード代のほかは全部村岡さん持ち。村岡さんの情熱と行動力と財力にすっかり依存しておりました。村岡さんがそれほど裕福とは思えなかったのですが、ともかくこちらは食うや食わずでしたから。

2回目の後、関わった人たちが、これからは仲間になっていっしょにやろう、名前は「日本音楽集団」にしよう——と決めたのが1964年の4月。そして6月に東京尺八三重奏団第3回演奏会を皆の友情出演でやって解散とし、11月17日が日本音楽集団（以下「集団」と略）の第1回定期演奏会で、日比谷の第一生命ホールでした。その直後、一番の柱であった村岡さんが退団。その頃村岡さんはスタジオの仕事がどんどん入るようになって来て、毎週のように続ける練習に穴をあけることになるから——というわけで誠にいさぎよい退き方でした。

自動車がまだ少なかった当時、演奏者の仲間うちでは最初に車を持って箏を乗せてスタジオをかけ廻っていた山内喜美子さんと、やはりスタジオをかけ廻っていた上参郷輝美江さんが、村岡さんに続いて同様な理由で退団。要するに集団では生活できないからで、最初の頃は情熱があって未だいくらかひまな人たちで成り立ったわけです。

それでもこの活動に参加してくれるものが次々と居て……現在67名。しかも集団で生活できないことはそのまま40年続いています。経済的理由だけではなく情熱を持っていてもどうすることもできないこともあり、創立時の団員は長沢勝俊、田村拓男と私の三人。団を去った人たちも各々立派に音楽活動を展開し、いつも熱い眼差しで団を見守ってくれています。そして今日のために初期の仲間が馳せ参じてくれました。

《NHK・FM放送》

集団発足の頃NHK・FMで「現代の日本音楽」という番組があっという間ゆる現代邦楽と呼ばれた作品が毎週流れました。1960年代から70年代までNHK委嘱による作品も沢山生まれ放送されました。

一方、集団の定期演奏会は都内で64年と65年が1回ずつ、66年～70年は年2回ずつでした。ほかにグループ又は個人による現代邦楽の演奏会も夫々が年1回ぐらいのもので、毎週全国で家に居ながら聞くことができるあの番組が、集団のみならず私を含めて若い演奏家たちの存在と活動を全国に知らしめた影響力は絶大なものがありました。

《夏の合奏研究会》

1971年から83年まで13回、毎年8月に北軽井沢で2泊3日の合奏研究会を開催しました。FM放送を聴いて集団を知り、私たちのレパートリーを演奏してみたいと思っていてくれた人が沢山いました。比較的若い人が多く全国から参集してくれ、その第1回目に参加した人の中から翌72年、集団に加わった若者が6名、うち3名が現在集団の中心になって演奏をしている三橋貴風(尺八)、吉村七重(箏)、田原順子(琵琶)です。第1回目の講習曲が「子供のための組曲」全五楽章(長沢勝俊作曲)と「古代舞曲によるパラフレーズ」より前奏曲(三木稔作曲)の2曲でした。

夏休みの小学校をお借りして1日目2日目ともパート練習。3日目午前、講堂で全員合奏。舞台でも放送でも度々演奏したこの2曲、いつも私たちだけだったこの曲を初めて集団以外の人たちが奏でてくれたのです。あの時のことを思い出すと今でも熱いものがこみ上げてくるのを覚えます。

《練習場》

初期には演奏者が11名で、中に小さいながら太鼓がありますから普通の家では練習できません。十七絃の宮本幸子さんが所属している正派邦楽会の道場を箏ともども使わせていただきました。しかし道場といえども木造の家でしたから、太鼓はやはりご近所から苦情が来て、事務局の方がいつも謝って集団へは遠慮がちにそれとなく伝えてくれました。家元の中島雅楽之都(なかしま・うたしと)先生がお元気な頃は、迷惑ばかりかけている集団の定期演奏会にいつも来て下さいましてカステラの楽屋見舞いなどいただいて恐縮したものです。不思議な家元でした。

1973年に正派道場の建てかえ工事に入るまで、お世話になりました。正派道場なしには集団の存続は危うかったでしょう。その後は長沢の縁で人形劇団ブークの稽古場、その次は三木さんの縁で東京音楽大学の教室、原宿の練習場、そして現在の笹塚のビルの地下室となりました。

以上、団の創立以前から1970年代前半の事柄から少しだけ書いてみました。もっともお伝えしたいこともありますし、その後の事、海外公演も含め沢山ありますが、今までプログラムや機関雑誌で折にふれ綴られて来たこともありますので、ここまでしておきます。

《勇退》

私は、26歳で集団創立から40年、新作の初演に数々関わってまいりましたが、ここ10年ぐらいい新作に触れていません。音符が細かい楽譜や判読が困難なものを初見から始めるには地下の練習場は暗いのです。若い人たちの練習に立ち会うと、この譜面でよく読めるものだと感心します。眼鏡をしてもどうもいけません。演奏能力も研究と経験によって身につけて向上している点もありますが失って来たものもあり、体力的にも無理はできません。

尺八吹奏をやめてしまうには、まだ時間があると思っていますが、入場料をいただいてひと前で吹くという行為を、いつか上手にやめられる準備をしようと思います。仲間にはありがたいもので創立団員である私を、いつも一目置いて立ててくれるのですが、40周年を境にこの後、団の第一線に立つことを控えて、私で役に立つことがあれば後の方にて演奏に加わって居ることにしてしまおう。

私と集団を支え、育てて下さったお客様や多くの方々に感謝いたしますとともに、今後とも変わらぬご支援をお願いいたします。

吹きだまりからほんとうの宝を!

小宮 多美江

私にとって日本音楽集団の歴史は、ある時期までの日本音楽舞踊会議の歴史とほとんど重なってみえます。

「音舞会」というのは音楽、舞踊、洋楽、邦楽、クラシック、ポピュラーを問わず集まった会でしたから、それぞれが互いの枠を越えて、わいわいとした雰囲気、ずいぶん学ぶことも多かったものです。伝統芸術研究集会というシンポジウムなどは、それこそ幅ひろく識者をあつめて、伝統の継承と発展の問題を考える場でした。たとえば、日本文化史のなかできいた「日本は大陸の文化の吹きだまりである」という話をおぼえています。そのときは主に、奈良、平安の時代のことでしたが、考えてみると、戦後の時代もまったく同じように考えられます。外国文化が、次ぎから次ぎへと入ってきました。いわゆる現代邦楽ブームだって、もとはそんな外からの風に吹かれて巻き起こったものだったかもしれません。

しかし、「吹きだまり」ということばは、いつもマイナスの意味だけで言うものではありません。集まってくる多種多様な宝物を、ここ日本で大事に保存する、それもある意味では他にみられない特技ではあります。が、逆にどんどん変えていくことだって、私たちにまかされているのです。世界のなかの日本が、吹きだまりの位置にあって、いかに創造性を発揮するか、それが、私たち自身の文化をつくる鍵なのだと思います。

日本音楽集団は、これからもそういう役割を果たしていってくれるものと期待しています。

(音楽評論家)

日本音楽集団の1964年、そしていま

長廣 比登志

日本音楽集団誕生の1964年は、いわゆる現代邦楽の演奏グループが競うように誕生した年であった。3人グループから数10人まで、その数7つ。こうした動きと連動したかのように、同年4月にNHKがラジオ番組「現代の日本音楽」を開始した。週1回のこの番組は、1972年3月までに作曲家111名の実数525曲の作品を放送して終了した。「集団」は1965年12月26日の初出演から32回出演。収録前のリハーサルから本番まで、演奏者、作曲家、制作スタッフの三者が毎回、作品の解釈、表現法、奏法、収録方法をめぐって議論をかさねるという、熱気に満ちた現場だった。「集団」の演奏は、聴取者の関心と話題をよぶとともに、高い演奏技術が番組の質的向上に多大な功績をのこした。60年代末、新聞雑誌が動きだした。伝統音楽への回帰・再評価と現代邦楽をめぐって、この時ほど大騒ぎをしたことはなく、その議論の中核には「集団」がいた。

周知のとおり伝統楽器による創作運動には、最大で80年の歴史がある。ある意味で楽派にちかい新日本音楽もその運動のひとつであり、あらまし脱声楽・器楽導入の方向に推移してきたといえないだろうか。NHKは1925年の放送開始時から、この運動を支え積極的に関わっていた。新日本音楽は、独奏曲と多声部の合奏曲(洋楽器入りの作品も)の創作。そして十七絃や低音三味線に象徴される新しい楽器の開発、という遺産を後世にのこした。1964年以降にも類似の事象が生じたこと、まだ記憶にあたらしい。

「集団」はおおきな装置をもつ実験工房であり、そこで開発された技術・技能の体系化組織化が、こんごの事業のひとつになるのではないだろうか。「集団」の窓から21世紀日本の現代音楽の一画がみえている。 祝 創立40周年。

(現代邦楽研究者)

三つのフェスタル・バラード／三木稔作曲・野坂恵子編曲

原曲は作曲者が芸大在学中(1954年)に作曲したピアノ曲。野坂恵子が1975年6月に編曲。第1回二十絃エコー文月の会(1975年7月23日青山タワーホール)において初演。

第一曲〈市のおもいで〉アセチレンガスのにおう夜のざわめき

第二曲〈夜の地車(だんじり)〉祭りに疲れて鎮守の森に帰る地車(関東では山車)

第三曲〈木偶(でく)まわし〉阿波の木偶と、よき時代の大道芸を結びつけて発想した。

1969年野坂恵子の開発による二十絃箏が一応完成しました。その発案の根拠についてはすでに語られているのでここではおぼします。新しい楽器の創作における材料と時間と工夫、そして経済的負担はかなりなものであったでしょう。胴体の大きさ、絃の太さと張りの強さ、琴柱の大きさ等が一度で答えが出るものではなく、即名器が出来るはずはありません。一応出来てから2年間は野坂一人でしたが、更に21絃となって完成した楽器は集団に定着し、もう全国に普及した数は何百になるのでしょうか。

本日は野坂恵子指導による9面の二十絃箏と3面の十七絃の響きをお聴き下さい。

鹿の遠音(しかのとおね)／琴古流より宮田耕八朗編曲・構成

雅楽尺八の伝来から今日までおよそ1300年。紀伊の興国寺の僧、覚心が帰朝したのが1254年ですから虚無僧の尺八は今年で丁度750年という歴史を持っています。その後永い年月の間に「広まった」と言うべきか「拡散した」と言うべきか、それらの虚無僧の尺八曲(本曲)を編纂し整理した黒沢幸八(号を琴古)(1710~1771)を源流とする琴古流は約250年、その時代背景からして本曲はほとんどが読経のような雰囲気を持っています。ところが「鹿の遠音」という本曲は、かなり趣を異にして、生々しい描写に基づいています。秋、雄鹿がケーンとかピーヨーというような声で雌鹿を呼びます。その描写を芯にして尺八1本で演奏する曲でしたが、いつの頃からか連管(2本の尺八)で、あたかも鹿が呼び合うかのような演奏形態が定着しています。もとより雄鹿は競い合うもので呼び合うということはありませんから、連管にした時点で、描写から音楽として一つ昇華し得たと考えられます。それでも生々しい描写のひとつとしてムライキという荒々しい奏法が効果的にしかも必然性をもって入っています。ここで奏者の2人が競いあう気になってしまうと、必然性を越えてしまう危険もはらんでいます。伝統音楽の発展的継承をうたった集団では伝統音楽シリーズという定期演奏会を催していたこともあり、連管による「鹿の遠音」は今までに度々とり上げ、学校公演の定番ともなっています。

第64回定期演奏会(1981年5月8日都市センターホール)の8管ということもありましたが、本日は10管で愛と温もりをお伝えしたいと思っております。

新千鳥の曲／吉沢検校原作、秋岸寛久編曲、尾崎太一作調

幕末の名古屋は、繊維産業がもたらす経済力によって繁栄した街でした。東海道と中山道との分岐点で商人や勤皇の密偵たちがしきりに行き交うところであり、260年の幕藩体制が今にも音をたてて崩れようとしていることをひしひしと感じる、そんな時代のそんなところに吉沢検校(1808~1872)は居りました。朽ち果てようとする幕藩体制を変革して新しい時代を目指す人々の原動力は商業の発展、つまり町人の経済力なのですが、それとはうらはらに、武士による支配を否定する代わりとして鎌倉以前のさらにその前を「古き良き時代」とする考えが興りました。

武士階級の教義たる儒学を唐心(からごころ)として退け、それに代わって国学を説く人々があらわれ、同時代の文化人の心をとらえました。吉沢はこの千鳥の曲創作にあたって江戸時代に発達した箏と地歌三絃との結びつきを否定して、三絃を入れず雅楽の趣をとり入れた調弦、そして歌詞には古今集から「しおの山・…」という前歌。さらに四国土佐藩の動きおだやかならぬ時、後歌では古い金葉集から、鳥にも心驚かす須磨の関守をうたった歌詞をとり上げているところなど、いか

にも激動の時代に生きた音楽家といえましょう。

「千鳥の曲」は第1回定期演奏会で山内喜美子と上参郷輝美江によって演奏され、その後「伝統音楽シリーズ」でもとり上げました。古典曲を集団編成に編曲した作品は、1976年の「新八千代獅子」が度々演奏されています。その後1977年の「新越後獅子」があり、この「新千鳥の曲」は10年前、第21次海外公演のために書かれアメリカで初演後、第136回定期演奏会（1994年11月17日津田ホール）で丁度30周年の日に披露されました。

本日は第1回の「千鳥の曲」に因んで山内喜美子が参加してくれます。後唄の前まで演奏します。

「子供のための組曲」より1・3・5章

組曲「人形風土記」より〈のろま人形〉〈流しびな〉／長沢勝俊作曲

子供の頃からお箏を弾いていたけれど、すっかり飽きてしまいどうしようかと思っていた時、「子供のための組曲」を聴いて、こんな素敵な邦楽作品があったのかと衝撃を受け、もう一度お箏に希望を持つことができました——こんな告白を聞かされたことが何度もあります。このような聴き手との出会いを作ることができた私たちは幸せものです。また合奏研究会によって、この曲が初めて他の人に受けとってもらえた手ごたえも至福の時でした。今日この舞台に居る初演者は、杵屋五三吉（杉浦弘和）、宮本幸子、宮田とその時は打楽器奏者であった田村拓男。再演で白根きぬ子、野坂恵子が加わり、「人形風土記」初演に望月太八、坂井敏子が加わりました。

1972年に「子供…」と「人形…」を入れたLPレコード（ビクター）が発売され、そこに載せた作曲者の言葉と、解説を書いた鞍掛昭二（創立団員）が「子供…」について述べた文章の末尾を次に掲げます。

●子供と人形と私●

私にとって子供と人形との縁はきってもきれないもののように思われます。戦後の何年かを人形劇団に所属し、これの作曲と演奏をするかたわら人形達と共に日本国中をまわり多くの子供達と接してきた私にとって、日本楽器との出会いの第一作が「子供のための組曲」であり、第二作が組曲「人形風土記」であったことも、今考えれば至極当然のなりゆきであったわけです。

子供の世界もまた人形の世界もともに素直であり、けがれの無い美しさに満ちたものです。しかもその素朴なありのままの世界のなかに人間の生命力の根源を感じさせるものを秘めています。私はこのすばらしい生命力に触発され、日本の楽器に新しい息吹を与えようと希いました。（長沢勝俊）

この曲は、その誕生の歴史にふさわしく、日本各地にいくつもの新しい日本楽器の合奏団体の誕生をうながしたのである。すなわち、いくつもの合奏団が、この曲を演奏することを契機として生まれ、日本の各地で、日本の楽器が新しい音楽、新しい合奏をかなでている。それこそ正しく、日本の楽器が現代によみがえった、たしかな証（あかし）なのである。（鞍掛昭二）

キビタキの森／宮田耕八朗作曲

東北本線の白河から西北西へ十数キロほどの甲子（カシ）高原へ登って行きますと、キビタキの森とよばれる森があります。そこには福島県の県鳥キビタキをはじめ、数多くの鳥たちや生きものが自然のままに保護されています。その森をたずねた時の印象を作曲したものです。（1979年6月15日作曲）

1、朝もやの薄れゆく時 2、山路を行く 3、にわか雨と森のざわめき 4、雫のうた

5、木もれ陽の響き 6、ゆれる木の葉と飛び交う鳥たち 7、鳥のカデンツァ
8、山路を帰る 9、キビタキの森との別れ

箏は津軽三味線のように奔放に動き回るところがあり、またベトナムの一絃琴の奏法にも似た倍音の動きを使っています。尺八のカデンツァでは鳥のさえずりや羽ばたきなどを模しています。

田村拓男企画による第54回定期演奏会「演奏者による作曲へのアプローチその2」(1979年7月6日青山タワーホール)で初演し、その後全国に広まった作品です。箏の弾き手を砂崎知子と決めてから2日で書き上げました。作曲より10年ほど前に訪ねた甲子高原の鳥の印象を綴り、曲名は「山鳥のナントカ…」などと思いつきながら、尺八のカデンツァを作るために再度甲子高原の森を訪ねましたところ、10年前には無かった「キビタキの森」という大きな看板のようなものが立っていましたので、即題名にいただきました。

「古代舞曲によるパラフレーズ」より「前奏曲」／三木稔作曲

江戸時代の箏曲を代表してひとくちに「六段・千鳥」と言うことがありますが、この二曲には約200年の隔りがあり作風がまるで異なります。集団のレパートリーで「六段・千鳥」のような言い方をすれば「子供・パラフレーズ」と言えるかもしれません。作曲年代はごく近いのですが作風は全然異なり、そしてどちらも団を代表する作品です。だいたいモダンな作風のもものは再演も演奏旅行の演目となることも少ないものですが、このパラフレーズだけは特別で1972年の初めての海外公演においても各地で好評でした。

始め前奏曲だけ作曲され第2回定期演奏会(1965年10月15日朝日生命ホール)で発表し、全曲はNHK委嘱で1966年10月19日NHKにて録音、10月24日第4回定期演奏会(第一生命ホール)にてステージ初演しました。☆

1971年夏の第1回合奏研究会の時には、全曲では技術的に負担が大きいため前奏曲だけ講習しました。団の得意なレパートリーですから今日は全曲お聞きいただきたいところですが、33年前のアマチュアがこの前奏曲にどんな気持ちでどんなふうにとり組んだのだろうかと思いを馳せてお聴き下さい。

☆ 全曲は〈前奏曲〉〈相聞(そうもん)〉〈田舞(たのまい)〉〈誄歌(るいか)〉〈囀歌(かがい)〉の5章です。

春の一日・冬の日・大津絵幻想 より／長沢勝俊作曲

私(宮田)の家のピアノ、ほとんど弾かれることのないアップライトの上に小さな宝物が乗っています。それはたった17頁のピアノ曲集、「冬の日」(1971年12月1日音楽の世界社発行)という楽譜です。曲目は、〈元気な子供〉〈雪が降ってきた〉〈行進曲〉〈寒い北風〉〈おじいさんのお話〉〈あわぶくたつた〉〈バラード〉という7曲で最後のバラードのほかは夫々30小節前後の小品です。子供にも弾けるように作られた曲ですがハッとするようなキラキラと楽しさに満ちた長沢音楽のエッセンスがあります。これをふくらませた合奏曲を是非——とお願いして1980年に「冬の日・パート2」ができました。“パート2”という“パート1”の説明をしなければならないので、その言い方はやめました。“パート1”は私の家のピアノの上にあります。

その後、「秋の一日」(85年)、「夏の日」(94年)、「春の一日」(97年)とできました。「大津絵幻想」(81年)ともども夫々全曲聴いていただきたい曲ばかりですが、限られた時間の中で全部を聴いたような気になれる(ちょっと無理かな?)抜粋を私の独断でいたしました。上手くいきましたらどうぞ拍手喝采をお願いいたします。

今回の出演元団員の日本音楽集团在団年

山内喜美子	1964年～1964年
杵屋五三吉 (杉浦弘和)	1964年～1979年
宮本幸子	1964年～1984年
野坂恵子	1965年～1984年
白根きぬ子	1965年～1993年
望月太八	1966年～1991年
坂井敏子	1967年～1993年
砂崎知子	1974年～1981年

日本音楽集団40周年記念作曲コンクール 本選会

Pro Musica Nipponia the 40th anniversary composition competition

集団の創立40周年を迎えるにあたり記念事業の一つとして作曲コンクールが企画されました。8月31日に応募が締め切られ、世界各地13カ国から46作品が寄せられました。9月には2004年度委嘱審査員西村朗氏によって第1次審査(譜面審査)が行われ、以下の7作品が選考されました。本選会は次のように公開の演奏会として行われ、第1位、2位、団員賞が選ばれます。

成田 和子 / 夕霧が そっと おおったのは
山本 良子 / 反閨～榊鬼様の舞 (へんばい～さかきさまのまい)
Giorgio Magnanensi / TAMAS III
後藤 真希子 / 青魄(しょうはく)
四反田 素幸 / 火の曲
成本 理香 / 小町少将道行によるパラフレーズ
菅野 茂 / HogakuII WVE-222 (演奏順未定)

指揮：板倉康明(客演)

日時：2004年12月14日(火) 17:00開演 (16:30開場)

入選作品発表・表彰式・レセプション 19:30～

場所：けやきホール(小田急線、東京メトロ千代田線「代々木上原」下車徒歩5分)

入場料：無料

2004年11月26日刊行!

長沢勝俊

音に命を吹き込む..

長沢音楽のすべて

長沢勝俊
音に命を吹き込む..
長沢音楽のすべて

日本音楽集団の西川浩平、水川寿也、宮越圭子の対話者が、“長沢プシ”の魅力を訪ね、長沢勝俊の音楽人生について語る。

長沢と共に歩んだ方々の貴重なメッセージを収録。また、作品年表も掲載。

A5判 定価700円

2004年

- 6月18日(金)アウトリーチ・コンサート 新富町シルヴァーウイング
 6月23日(水)アウトリーチ・コンサート 中央区立阪本小学校
 7月 6日(火)不二聖心女子学院高等学校音楽鑑賞会 長泉町文化センター
 7月 7日(水)～9日(金)北九州巡回学校公演 響ホール、北九州芸術劇場大ホール、ウェルとばた
 7月 8日(木)西武学園文理高校音楽鑑賞会 狭山市民会館
 7月14日(水)アウトリーチ・コンサート 中央区立有馬小学校
 7月16日(金)アウトリーチ・コンサート 中央区立佃島小学校
 7月25日(日)～8月8日(日)渋谷区伝統和楽器こども教室「三味線にチャレンジ」「笛にチャレンジ」
 前期5回 渋谷区立上原小学校
 7月27日(火)敦賀市小学校～ズラリ和楽器にぎやかコンサート 敦賀市民文化センター
 7月31日(土)パシフィック・ミュージック・フェスティバル
 ～PMF2004公演(四季「ダンス・コン」、大津絵幻想他) 札幌芸術の森アートホール
 8月25日(水)四日市市子ども芸術劇場2004(ごんぎつね他) 四日市市文化会館第2ホール
 9月 8日(水)館林市小学校音楽鑑賞会 館林市文化会館
 9月25日(土)富士見丘学園中・高校鑑賞会 富士見丘学園アリーナ
 9月28日(火)第176回定期演奏会
 ～コンポーザーズ・プロジェクト・シリーズⅥ 間宮芳生氏からのメッセージ 津田ホール
 10月 1日(金)捜真女学校音楽鑑賞会 捜真女学校礼拝堂
 10月 8日(金)大垣市小学校音楽鑑賞会 スイトピアセンター文化ホール
 10月20日(水)佐倉市井野中学校公演
 10月29日(金)静岡県立西高校芸術鑑賞会 静岡市民文化会館中ホール
 11月 4日(木)大垣市立興文中学校音楽鑑賞会
 11月 9日(火)和洋九段女子中・高校音楽鑑賞会
 11月14日(日)八日市市芸術文化祭～市制50周年記念コンサート 八日市文化芸術会館
 11月15日(月)秋草学園音楽鑑賞会 所沢市民文化センターミュージズアークホール
 11月16日(火)岩槻市立太田小学校音楽鑑賞会
 11月26日(金)第177回定期演奏会～創立40周年記念コンサート 第一生命ホール
 12月 8日(水)宮城県加美町中学校音楽鑑賞教室
 加美町・中新田パッパホール、加美町・小野田やくらいホール
 12月13日(月)成城学園音楽鑑賞会
 12月14日(火)日本音楽集団40周年記念作曲コンクール本選会 けやきホール
 12月23日(木)日本音楽集団～邦楽の魅力～(新八千代獅子・「四季」ダンス・コン他)
 めぐるパーシモンホール(大ホール)

2005年

- 1月 2日(日)～5日(水)新春を飾る日本の響き～和楽器の調べ
 2日(日):東京オペラシティコンサートホール 3日(月):町田市民ホール
 4日(火):横浜みなとみらいホール 5日(水):大宮ソニックシティ大ホール
 1月25日(火)第178回定期演奏会～新しい音を探る vol.2 津田ホール
 1月31日(月)生協コープかごしま文化鑑賞会「まい・夢」第12回例会(「四季」ダンス・コン他)
 鹿児島市民文化ホール(第2)
 2月12日(土)～3月26日(土)渋谷区伝統和楽器こども教室「三味線にチャレンジ」「笛にチャレンジ」
 後期5回 渋谷区立加計塚小学校

賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動を目指したく、ご協力お願い申し上げます。 募集の詳細はチラシをご参照ください。

【賛助会員五十音順】

法人 (株)全音楽譜出版社 (株)宮本卯之助商店 NPOTリトン・アーツ・ネットワーク	個人 青柳 克 堯 新井 塚 輔 飯塚 吉 子 飯藤 美 恵 伊藤 村 厚 今村 西 子 江 西 子 緑	大 富 枝 太 颯 衣 川 壁 正 岸 藤 則 後 水 子 白 杉 和 杉 田 彦 繁	関 富 枝 手 颯 衣 土 壁 正 藤 藤 則 中 水 子 浜 杉 和 古 田 彦 川 羽 繁	厚 雄 愛 子 恵 見 雅 弘 靖 子 靖 子 衣 山	本 田 水 野 森 正 渡 玲 渡 京 渡 邦 渡 治 渡 治 Andrew MacGregor	実 徳 徳 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
--	---	--	--	---	--	--

特定非営利活動法人

日本音楽集団

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302 TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
http://www.promusica.or.jp/ E-Mail office@promusica.or.jp



アイ・エム・エス

●楽器リース ●保管 ●移動 ●ステージ・スタッフ派遣
〒167-0043 東京都杉並区上荻2-3-4 ゆうでんビル
PHONE.03-3397-2292
FAX. 03-3397-7728

箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、
楽器の本質を追究した箏

十七絃箏

二十絃箏

二十五絃箏



時を超え心に残る音づくり

有限会社 琴光堂

〒152-0003 東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL03(3792) 8481 FAX03(3792) 8437
E-mail: tokyo@kinko-do.com